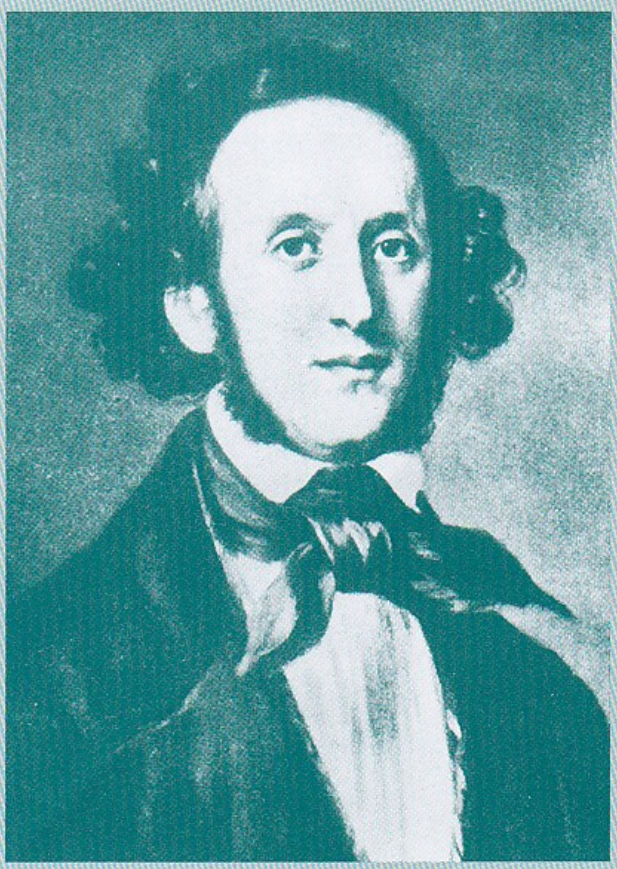
盛岡バッハ・カンタータ・フェライン演奏会

バッハとメンデルスゾーンの
カンタータの夕べ



'92　3月21日(土)

岩手県民会館大ホール

午後6：30開演

ご あ い さ つ

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン
代表　　下田　潤

本日は年度末のお忙しい中、御来場いただきまして有難うございます。

昨年は、私共の盛岡バッハ・カンタータ・フェラインも発足以来15周年を迎え、西独演奏旅行に続き、ドイツ・バッハゾリステンとの共演による演奏会を行うことが出来ました。これもひとえに皆様方の暖かい御支援によるものと、心より感謝申し上げる次第です。

さて今回は、J. S. バッハのマタイ受難曲を後の世に再認識させたメンデルスゾーンの曲を加えた、『バッハとメンデルスゾーンのカンタータのタベ』として演奏会を企画いたしました。

ドイツ・バロックの音楽の流れを追求して行く私達の意気を感じとっていただければ幸いです。

最後に、指揮者佐々木正利先生、コンサートマスター蒲生克郷先生をはじめ、アンサンブル、ソリストの諸先生方、後援をいただきました皆様方に感謝して、ごあいさつといたします。

後援：岩手県教育委員会・盛岡市教育委員会・岩手日報社・ＮＨＫ盛岡放送局・岩手放送・テレビ岩手・エフエム岩手・岩手日独協会

プログラム

I 部

●J．S．バッハ	カンタータ第93番 Wer nur den lieben Gott läßt walten （ただ神様のみに統治され）
●F．メンデルスゾーン	カンタータ Wer nur den lieben Gott läßt walten （ただ神様のみに統治され）

休　憩

II 部

●J．S．バッハ	カンタータ第161番 Komm, du süße Todesstunde! （来たれ、汝甘き死の時よ）
●J．S．バッハ	モテット Jesu, meine Freude より 第1曲コラール （イエスよ、我が喜び）
●F．メンデルスゾーン	カンタータ Jesu, meine Freude （イエスよ、我が喜び）

指　　揮……佐々木　正　利
ソプラノ……日　比　吉　子
ア ル ト……佐々木　まり子
テノール……佐　藤　淳　一
バリトン……小　原　一　穂
コンサートマスター…蒲　生　克　郷
オルガン……今　井　奈緒子
オーケストラ……東京バッハ・カンタータ・アンサンブル
合　　唱……盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

“風林火山”の極意に生きた二人の巨匠

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン
常任指揮者 佐々木　正　利

本日はお忙しい中、私ども盛岡バッハ・カンタータ・フェライン（略称フェライン）の演奏会にお出掛け下さいまして誠に有難うございます。昭和52年２月に『マタイ受難曲を歌う会』を前身母体として産声を上げたフェラインも、お陰様をもちまして満15才になりました。昨年は、第２回ドイツ演奏旅行を敢行し、引き続き10月にはこの15周年を記念して、多くの方々のご協力により、ドイツ・バッハ・ゾリスデンの演奏会を催すことができ、幸せな１年であったと思います。一介のアマチュア・グループにすぎない私たちが、このように長きにわたって充実した活動が続けられるのも、ひとえに皆様方のご支援の賜物と衷心より感謝しております。この御恩に報うべく、１年１年、まごころ込めた、手づくりの音楽を目標にして活動を続けておりますが、一方、外的要因に捕らわれすぎることなく、心底私たち自身が先達の音楽遺産を享受せんとする姿勢こそが、皆様への最大の恩返しになるとも信じております。一昔前と違って現代は、地方からの文化発信を期待される時代となりました。さすれば、その意味でも私たちの活動にも今まで以上にグローバルな視野、長期的な展望が求められる時代となったと言えるでしょう。今回、２年後に予定されるマタイ受難曲演奏を見越したプログラムを選定致したのもこうした観点に則ったものと言えますが、それまでの過程においては《ただやれば成功式》に陥らないように相当の精進が必要と思われます。尤も、アマチュア合唱団の常として、毎年おこるメンバー交替は避けられる由もなく、アメーバのように時事刻々と形態が変化するのは自明のことでありますから、目標実現には様々な紆余曲折が予想されますが、いずれにしても、活動の基本姿勢・理念を損ねないよう会員（注１）とともに鋭意努力を続けていく所存であります。

ところで、合唱団といっても一つのミニ社会、実に様々な問題が生ずるものです。その解決にあたっては、正に人生の縮図を見る思いです。これは音楽そのものにも共通して言えることで、一つひとつ起承転結の妙を形作らねばならず、又山あり谷ありの世界をうまく乗り越えて初めて真価が発揮されることになります。【音楽をする】ということ……暇人と才人の道楽にも似た、独特の高尚!?な響きをもつ言葉ですが、冗談はさておき、その実、根気強さ、勝負強さを要求される難儀な精神的所業なのです。趣味の世界、即ちアマチュアですらそうなのですから、それをなりわいにしている人々の苦労は並み大抵のものではありません（尤も、私のようなズボラな性格の持ち主には、あまり縁のあることではありませんが）。

このような音楽を職業として大成功した（かに見える？）バッハとメンデルスゾーン。ともに敬虔なクリスチャンとして、ドイツを代表する大作曲家ではありますが、120余才も違うこの二人には、音楽史上、特別重要な関係があります。それは専ら後輩メンデルスゾーン側からの関係樹立なのですが、メンデルスゾーンの数ある功績の中でも特筆される、あのあまりにも有名な、バッハの《マタイ受難曲》再演の功績です。約１世紀にわたって忘れられていたバッハの音楽への関心を再び呼び起こし、19世紀におけるバッハ再評価の口火を切ったことの重大さは、後世の人間にとって感謝しても感謝しきれるものではありません。バッハに対する不当な扱いを証明するものとして、お膝下のライプツィヒにおいてのこと。メンデルスゾーンによるバッハの偉大さの再認識後、紛失した彼の楽譜を収集しなおす際、肉屋の包装紙にそれが使われていたことが判明、当事者も驚いたというのは有名な話です。1829年、ツエルター、スポンティーニ（注２）などの軋轢に屈せず、ベルリンのジング・アカデミーにおける勇気ある《マタイ》の約100年ぶり（注3）の再演は、ひょっとして教養ある富裕な生涯一面のみがクローズアップされることの多いメンデルスゾーンの男気を象徴するものと言えるのではないでしょうか。

さて、勝負の世界の本質をつく言葉として、我が国には昔から“風林火山”という言葉があります。風のように素早く行動し、時には烈火の如く燃え上がり、林の如く深く沈着し、そして、何よりも山の如く冷静に動ぜず、という戦いの極意を表した言葉です。しかし音楽そのものを勝負の対象とすることは、たとえ教育的配慮がそこに加味されたとしても認めがたいものがあります。プロが行う明確なる意図をもっての競い合いが理解されたとしても、前述のアマチュアが音楽の優劣に一喜一憂することの不自然さは、音楽することの本質を考えると健康的とは言えません。ところが音楽で飯を食わんとする音楽家にとっては、時には死活問題としての勝負が重要なこととして重く伸し掛かってくることもあるのです。如何にして重用されるか、如何にして自らの音楽を認めさせるかということが音楽家としての生命に係わることになるからです。その意味では、バッハとメンデルスゾーンも、自己の理想と現実とのギャップに敢然と戦いを挑んだ音楽家でありました。バッハは、全生涯にわたって、大勢に安易に迎合するということは決してありませんでしたし（だからこそ、あれだけの業績を残せたのですが）、それに対し、比較的順風満帆に見えるメンデルスゾーンですら、ベルリンの逆風に超然と立ち向かっていったのです。1824年、15才のメンデルスゾーンが《マタイ受難曲》の写譜を入手して以来、バッハに対する尽きぬ興味は留まることを知らず、彼がバッハの精神に深く感銘を受けたであろうことは、1830年以降続々と生み出される教会音楽の傑作の数々をみてもよくわかります。オラトリオの分野で彼の果たした役割は非常に大きく、歴史的でさえあることは《聖パウロ》《エリヤ》の創造的な力をみても紛れもない事実です。常に冷静沈着な読みをもって時世と戦って真理を勝ち得ていく者。バッハとメンデルスゾーンは正に“風林火山”を地でゆく勝利者でありました。

今回のプログラムは、両者の同名異曲をもってその繋がりを明らかに感じようとするものでありましたが、オーケストラ編成の都合上、バッハのモテット《イエスはわが喜び》は残念ながら割愛させていただきました。その代わりに演奏する《カンタータ161番》には、《マタイ受難曲》に用いられている、かの有名な受難コラールが主題的に登場いたします。そして、このカンタータは、メンデルスゾーンがこよなく愛したカンタータでもあるのです。

フェラインの母体が『マタイ受難曲を歌う会』であったことは前にも述べた通りですが、今度はそのフェラインが《マタイ》に取り組もうとしています。しかしそこには決定的な大きな違いがあります。前者は《マタイ》を歌うために集まった臨時の合唱団であり、後者は恒常的な合唱団が《マタイ》を取り上げるというものです。両者を一概に比較することはできませんが、少なくとも啓蒙的な《マタイ》から、より内容の濃い《マタイ》に変わるよう精進を積まねばなりません。先頃のアルベールビル冬季オリンピックでの距離スキーの王者ウルバン選手が、勝利インタビューに答えて、ノルウェーの森には「どんな木でも天までは届かない」という格言があることを言っていました（スポニチ'92.2.23.）。どんな高い木でもいつかは追い越されるという意味なのですが、その真意は「そうやって互いに戒め合いながら、木が上へ上へとたゆまず伸びたから、大きな森ができたという意味」なのだそうです。《マタイ》がきっかけになってフェラインが誕生したことの大きな意味合いは正にこれに通ずるものがあるのではないでしょうか。目的を違わずに切磋琢磨できる仲間を本当に大切にする意味でも、私たちフェラインは、二大巨匠に合い通じる"風林火山"の精神をもって活動に勤しまなければならないと思っています。

最後になりましたが、万難を排してこの演奏会に臨んで下さいましたソリスト、オーケストラの皆さんに心よりの感謝を申し上げます。彼等も又、"風林火山"の精神を携えて、我が国の音楽界をリードする熱血漢であるのです。

注1：盛岡バッハ・カンタータ・フェラインは、バッハのカンタータを中心に、それにつながる古今東西の合唱曲などを楽しんで歌い学ぶ合唱団です。合唱団ですからメンバーは団員というのが普通ですが、フェライン(Verein)が協会、仲間などを指し示すドイツ語ですので、合唱団メンバーを会員と呼ぶのです。

注2：ツエルターはメンデルスゾーンの作曲の師。後に彼が指揮をすることになったベルリン・ジング・アカデミーの指揮者です。メンデルスゾーンは10才の時にこの合唱団にアルトで入り天才ぶりを注目されました。スポンティーニは伊のオペラ作曲家。メンデルスゾーンが初めて作曲したオペラ《カマコの結婚》（1825）の上演にケチをつけ、続演不可能にしてしまいました（尤も彼は自らのもの以外にはおしなべて否定的でしたが）。この二人のみならずベルリンの音楽界はメンデルスゾーンの才能をやっかみ辛く当ったようです。

注3：現存する《マタイ》の自筆譜は1736年バッハ自身による浄書譜。メンデルスゾーンが再演するちょうど100年前の1729年の聖金曜日に《マタイ》が演奏されたのは記録によって明らかであります（が、初演かどうかはわからない）。最新の研究によりその2年前（1727年）に既に演奏されたらしいことがほぼ確実です（詳しくは、東川清一著：バッハ研究ノート、'81.音楽之友社参照）。

プロフィール

指揮　佐々木　正　利

東京芸術大学声楽科卒業、同大学院修士課程及び博士後期課程修了。声楽を畑中良輔、須賀靖元、小林道夫、森明彦の各氏に、楽理を服部幸三、角倉一朗の各氏に、作曲を松本民之助に、宗教音楽を岳藤豪希氏に師事。芸大在学中より、バロックから現代に亘る宗教作品、特にＪ・Ｓ・バッハの声楽曲に深い造詣を示し、芸大メサイヤ公演、定期演奏会はじめ大学、一般合唱団と多数共演、特に1978年芸大マタイ受難曲公演にて福音史家として高く評価され以後そのスペシャリストとして揺るぎない地位を得ている。

1979年シュトゥットガルトに渡り、ローレ・フィッシャー教授に師事。同年南ドイツにて数回歌曲リサイタルを開き好評を博す。1980年第６回ライプツィヒ国際バッハ・コンクール声楽部門第５位入賞。同年より1982年まで、デットモルト北西ドイツ音楽大学に学び、ヘルムート・クレッチマール教授に師事、この間同大学定期演奏会で、ドヴォルザーク・レクエイエムのテノールソロを務めたのをはじめ、ドイツ、オーストリア、スイス、フランス、オランダ、ベルギー各地で一流オーケストラ、合唱団と多数共演。1980年ウィーン楽友協会ホールに於けるマタイ受難曲においては「若き日のペーター・シュライヤー」と新聞各紙で絶賛される。1982年ハンブルグ・ブリュッセルのロ短調ミサでは特に高い評価を得た。帰国後もＮ響、読響、都響日フィル、新日フィル、東響等の定期演奏会等に出演し、Ｋ・マズア、Ｈ・シュタイン、Ｈ・ブロムシュテット、Ｈ・ヴィンシャーマン、Ｈ・リリング、小沢征爾、秋山和慶の各氏等と共演。1985年ザルツブルグ音楽祭に招かれ、Ｒ・バーダー指揮のベルリン聖ヘドヴィヒ聖歌隊、ザルツブルグ・モーツァルテウム管弦楽団とバッハ・マニフィカト、モーツァルト載冠ミサを共演、好評を博す。滞独中オペラでは、コシ・ファン・トゥッテ・フェランド、フィデリオ・ヤッキーノ、スカルラッティ・グリセルダ・コッラード等で出演、現在までリサイタル10回、NHK-FMリサイタル５回等歌曲の分野でも活躍。長年にわたり、小林道夫氏のもと東京芸大バッハカンタータ・クラブの指揮者を務め、後進の指導にあたる。1987、88年にはＨ・リリング音楽監督のバッハアカデミーにて、テノール・マスタークラスの講師を務める。現在、岩手大学教育学部音楽科助教授。二期会会員。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、仙台宗教音楽合唱団、岩手大学合唱団、東北大学混声合唱団各常任指揮者。
グルッペ・ベッヒライン会員、仙台バッハ・アカデミー理事
岡山バッハ・カンタータ協会指揮者、水戸バッハ・コレギウム音楽顧問。

ソプラノ　日　比　吉　子

東京芸術大学声楽科卒業。1973年スイス、1980年西ドイツ・シュトゥットガルトに留学。第20回文化放送音楽賞受賞。声楽をネトケ・レーヴェ、中山悌一、大熊文子の各氏に、リート解釈をコンラート・リヒター、ドイツ語発音をウタ・クッター各氏に師事。11回のリサイタルの他、放送に、数多くのコンサートに、そして宗教曲のソリストとして出演。1985年からは東京室内歌劇場のコンサートシリーズの１つとしてのアンサンブル活動も行なっている。二期会会員、東京室内歌劇場会員、日本フーゴー・ヴォルフ協会同人、日本女子体育短期大学助教授。

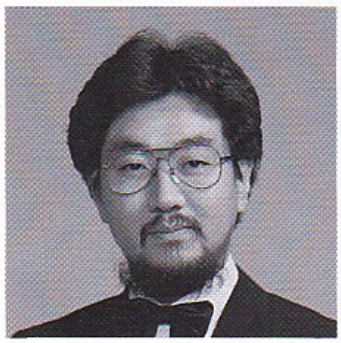
アルト　佐々木　まり子

東京芸術大学声楽科卒業。同大学院修士課程独唱科修了。毎日学生音楽コンクール西日本一位。ＮＨＫ新人演奏会出演。伊藤亘行、森明彦の両氏に師事。

学部在学中より小林道夫氏のもとにおける東京芸術大学バッハ・カンタータ・クラブ演奏会において数多くのカンタータ、オラトリオのアルト・ソロを受け持つ。又、大学合唱団及び一般合唱団と多数共演。モーツアルト「レクイエム」「戴冠ミサ」、ヘンデル「メサイア」、バッハ「ロ短調ミサ」などに出演する。1980年にデットモルト北西ドイツ音楽大学に留学し、ヘルムート・クレッチマール教授に師事。その間、北ドイツにおいて、バッハを中心とした宗教音楽演奏会に数多く出演。ヒルデスハイムにおける「アルト・ソロ・カンタータ」、ミュンスターにおけるＣ．Ｐｈ．Ｅバッハの「マニフィカート」は新聞紙上で絶賛される。

帰国後もＨ．ヴィンシャーマンとの共演をはじめ、「マタイ」「ヨハネ」両受難曲、「ロ短調ミサ」「クリスマスオラトリオ」、多数のカンタータ、ヘンデルの「メサイア」「エジプトのイスラエル人」、メンデルスゾーンの「エリア」などオラトリオのソリストとして、東京を中心に、札幌、仙台、横浜、名古屋の各地で演奏活動を行っている。

1985年には西ドイツのオルデンブルク、アーヘンにて、ヘンデルの「ブロッケス受難曲」、バッハの「復活祭オラトリオ」のアルト・ソロを歌い、1986年にも「メサイア」のソリストとして渡独。岩手大学合唱団ヴォイストレーナー。グルッペ・ベッヒライン・盛岡楽友協会会員。



テノール　佐　藤　淳　一

東京芸術大学声楽科卒業。同大学院修士課程独唱科修了。

吉岡巖、酒井弘、藤村晃一の諸氏に師事。1990年～91年にミュンヘンへ留学。アダルベルト・クラウス氏の許で宗教音楽を中心に研鑽を積む。また、ハンス・マルティン・シュナイト氏に特別レッスンをうける。

現在までに３回リサイタル開催。その他数多くのジョイントコンサートに出演。また、ヘンデルのメサイアをはじめ、バッハのカンタータ、ミサ、受難曲のエヴァンゲリスト、モーツアルトのミサ、レクイエム、シューベルトのミサ、ハイドンのミサ、オラトリオなど宗教曲のソリストとして活躍。仙台オペラ協会主催「オペラのけいこ」「売られた花嫁」「カルメン」や「ラ・ボエーム」「フィガロの結婚」「女の城」といったオペラにも出演。在独中にはハイドン「天地創造」やバッハのカンタータ等の演奏会に出演し絶賛される。

合唱との関わりも深く大学や一般の合唱団のボイストレーナーとしての他に自らもプロ男声合唱団クロスロードシンガーズのコンサートマスターとして九州をはじめ、山陰、北陸、関東など全国各地で公演を行い、また数々の合唱曲のレコーディングも行っている。

現在、尚絅女学院短期大学講師　クロスロードシンガーズコンサートマスター。

バス　小原一穂

岩大附属小学校、同中学校、盛岡第一高等学校、岩手大学教育学部音楽科卒業。東京学芸大学大学院修士課程修了。森　肇子、今関由紀子、移川澄也、中村義春、佐々木正利、P・フッテンロッハーの各氏に師事。1985年、90～91年渡独。1986年、1989年H・クレッチマール公開レッスン受講

1987～88年、H・リリングが芸術監督を務めるバッハアカデミーに参加、修了演奏会に出演。ソリストとして、第9、メサイヤ、クリスマスオラトリオ、ミサ曲、レクイエム等を大学及び一般合唱団と共演。岩手県民オペラ、盛岡100音楽祭出演。盛岡楽友協会会員、盛岡バッハカンタータフェライン・コンサートマスター。現在、岩大附属小学校勤務。

コンサートマスター　蒲生克郷

1976年東京芸術大学卒業。NHK-FM『夕べのリサイタル・新人演奏会』に出演。1976年～1978年渡独。ヒルデスハイム市立歌劇場管弦楽団奏者、ヒルデスハイム室内管弦楽団コンサートマスターを務める傍ら、ヴュルツブルク音楽大学にて研鑽を積む。帰国後は室内楽奏者として憩弦楽四重奏団、東京バロックアンサンブル、東京バッハアカデミー、久合田緑弦楽四重奏団等で活躍する一方、芸大バッハカンタータクラブ、盛岡バッハカンタータフェライン、盛岡バッハアンサンブルの指揮者を務めた。1987年～88年神戸女学院大学講師。現在、アンサンブル of トウキョウ、エルデーディ弦楽四重奏団各メンバー。水戸バッハコレギウム指揮者。東京芸術大学弦楽研究部講師。多久興、海野義雄、ボリス・ゴールドシュタインの各氏に師事。

オルガン　今井奈緒子

東京に生まれる。東京芸術大学オルガン科卒。オルガンを河野和雄、秋元道雄、廣野嗣雄の各氏に師事。ドイツ国立フライブルク音楽大学にてジグモンド・サットマリー氏に師事し、同校を最優秀で修了。在学中、1985年、ドイツ・リューネブルク市におけるゲオルク・ベーム国際オルガンコンクールに、また'88年ベルギー・ブルージュ国際J.S.バッハーC.Ph.E.バッハコンクールに入賞。この間1979年、'91年北ドイツ、'88年オランダ・ハーレム、'90年スペイン・サラマンカなど各地の国際アカデミーに学ぶ。

現在、東京芸術大学オルガン科講師。日本キリスト教団霊南坂教会オルガニスト、国際キリスト教大学副オルガニスト、新宿文化センターオルガニスト。日本オルガニスト協会、日本オルガン研究会会員。

曲　目　解　説

「神の館の恩寵ある所」ミヒャエル　シュティーゲマン 1918　小原一穂　小原育世　訳

1829年3月11日、最後列の座席まで埋め尽くされたベルリンジングアカデミーにおいて、歴史的規模の音楽イヴェントが催された。弱冠20歳になったばかりの青年、フェリックス、メンデルスゾーン・バルトルディの指揮による J. S. バッハ「マタイ受難曲」の再演である。あの聖トーマス教会のカントールの死後与えられる事となった、ほぼ百年前の作品の最初のリバイバル公演なのである。

メンデルスゾーンは指揮者やオルガニストとしての活動を通してバッハに対する彼の賞讃の気持ちを明らかにしたが、もっと明白なことは、彼自身の宗教曲が彼をして19世紀におけるプロテスタント教会音楽にとってブラームスと並ぶ最も重要な後継者とならしめたことである。

しかしながら彼がやみくもにバッハをモデルとしたのではないことは、彼が友人であるEduard Devrientに宛てた1831年7月15日付の手紙によっても証明される。(この友人は前述の記念すべきマタイ受難曲公演においてイエスのパートを歌っていた。)

「私は、気持ちの命ずるがままに作曲していますが、もし歌詞が私に与える気持ちがバッハと同じようなものであったなら、どんなに喜ばしい事でしょう。

私が内容でなくバッハの形式だけを単に真似しているなどとは、あなたもゆめゆめ思わないはずです。もし、そんなことがあったなら嫌悪と空虚さなしには一曲さえしまいまで書くことはできません。」この記述はカンタータ「Christe、du Lamm Gottes」(神の子羊であるキリストよ)に当てはまっている。この4声の合唱と小オーケストラのための作品は、メンデルスゾーンが1827年のクリスマスに彼の最愛の姉であるファニに献呈したものである。

終始ソプラノに委ねられた定旋律は、ルターの1528作のコラールによるもので、歌詞はドイツ語に翻訳されたアニュス・ディであり、プロテスタントの礼拝に用いられていたものである。

この3部分からなる作品には、その合唱作曲技法上の多声的な厳格さにも拘らず、メンデルスゾーンが真にロマン派の作曲家であったことが表われている。

このカンタータの瞑想的な性格を強調するかのように弦楽器の8分音符による修飾は静かに流れていくのだが、そこには正に19世紀初頭の、響きの美学が保たれている。

カンタータ、Christe、du Lamm Gottesがメンデルスゾーンの研究者にちの間で、早くから知られているものであったのに対し、コラールカンタータJesu meine Freude(イエスは我が喜び)の自筆譜がやっと日の目を見たのは1962年のオークションでのことだった。

実は、1869年に書かれたフランス語の伝記の中でこのカンタータに関して言及している箇所があるのだが、4部合唱と弦楽器、任意に加えられるオルガンのための1つの楽章が紛失したものと見做されていた。

このカンタータはヨハン・フランクにより1653年に書かれた詩の始めの一節とその詩に同年、ヨハン・クリューガーが作曲したものを基にしている。

メンデルスゾーンは、少なくともバッハの同名のモテット、BWV 227(1723年)を知っていたに違いない。というのは、この曲がベルリンジングアカデミーのレパートリーの一部として組み入れられているからである。それ故、各声部に多数の模倣を施した彼のコラールカンタータの対位法上の構造には、バッハの作風の影響が色濃く表われ、弦の伴奏部分もロマン派の快い音調ではなくバロック的な厳格さで貫かれている。

さらに、メンデルスゾーンがまた違った面でバッハをモデルとしている点がある。バッハがたびたび彼のスコアの冒頭に“J. J.”(Jesu Juva=Jesus help)というイニシャルを記したのを真似て、自作のJesu meine freude の表紙に“H.D.m”(Hilf Du mir=Help you me)と書き留めていることなどがまさにそれである。

現在はシカゴに保管されている自筆譜の最後には、「1828年1月22日、ベルリン」と書かれているが、その前年から作品に着手していたものと思われる。

コラール・カンタータ Wer nur den lieben Gott läßt walten.(愛しい神にのみ身を委ねる者は誰でも)はソプラノ、4部合唱と弦楽による作品である。この作品もまた、全く最近になってから、研究者により発見されたものである。この作品の写しは、歌手であっ

たフランツ・ハウザーの音楽に関わる遺物の中から見つけられ、このレコーディングの基礎となっている。バッハの同名のカンタータBWV 93の写譜をメンデルスゾーンに送ったのもこのハウザーであった。

1834年3月16日、メンデルスゾーンは、彼に感謝している。

「それから私はWev nur den …を正しく最後まで読まなくてはいけませんでした。私は今までこの曲を知らなかったので、私自身のやり方で作曲していたのです。今、思うことは、私の作ったいくつかのパッセージは、とてもいいものか、まあまだ位だということです。(しかし他のところはあまりよくありません) そして、いくつかは老セバスチャンにそっくりな点もあるようです。何と嬉しい事でしょうか。」

前述の幾分短か目な2曲のカンタータに比べ、このカンタータはバロック的な意味での本来のカンタータの形式を取っている。

歌詞対訳

J. S. バッハ
Kantate Nr.93
Wer nur den lieben Gott läßt walten

カンタータ　93番
ただ神様のみに統治され

1. choralchor

Wer nur den lieben Gott läßt walten,
und hoffet auf ihn allezeit,
den wird er wunderlich erhalten,
in allem Kreuz und Traurigkeit.
Wer Gott, dem Allerhöchsten, traut,
der hat auf keinen Sand gebaut.

ただ神様のみに統治され、
いつも神の出現・援助を望むものは、
十字架と悲しみの中で、
不思議な神により支えられる。
最も高き神を信頼する者は、
砂の上に（家など）建てない。

2. Recitativo e Choral

Was helfen uns die schweren Sorgen?
Sie drükken uns das Herz mit Zentnerpein,
mit tausend Angst und Schmerz
Was hilft uns unser Weh und Ach?
Es bringt nur bitt'res Ungemach.
Was hilft es, daß wir alle Morgen
mit Seufzen von dem Schlaf aufsteh'n
und mit beträntem Angesicht des Nachts
zu Bette geh'n?
Wir machen unser Kreuz und Leid
durch bange Traurigkeit nur größer.
Drum tut ein Christ viel besser,
er trägt sein Kreuz
mit christlicher Gelassenheit.

重き憂いと煩い我らに何の益ありや？
それは心を圧し拉ぐのみ、
百斤の苦難、千の恐れと苦痛をもて
われら苦しみ叫ぶとも何の益ありや？
それは苦き敗北をもたらすのみ
何の益ありや？われら朝ごとに
嘆息をもてねむりより起き出で
また泣き濡れし顔をもて夜毎
床に入るとも。
われらはおのが十字架と苦しみを
恐れと悲しみゆえにただ増し加えるのみ。
ゆえにキリストの者の歩みは遙かに勝れり。
彼はおのが十字架をばキリストに委ねし
沈着をもて負い行くなり。

3. Aria

Man halte nur einwenig stille,
wenn sich die Kreuzesstunde naht,
denn unsres Gottes Gnadenwille
Verläßt uns nie mit Rat und Tat.
Gott, der die Auserwählten kennt,
Gott, der sich uns ein Vater nennt,
wird endlich allen Kummer wenden
und seinen Kindern Hilfe senden.

しばし静まりておるべし、
十字架の時刻（とき）の近ずき来るとき
げに恵みを得させんとするわれらの神の御意は、
われらを決して見捨てず、言葉と行いをもて助けたもう。
選ばれし者らを知りたもう御神、
われらの父と称えられたもう御神は
ついにすべての悩み悲しみを去らしめ
その子らに救いを施したまわん。

4. Aria(Duetto) e Choral

Er kennt die rechten Freudenstunden,
er weiß wohl, wenn es nützlich sei.
Wenn er uns nur hat treu erfunden
und merket keine Heuchelei,
so kommt Gott, eh' wir's uns versehen,
und lässet uns viel Gut's gescheh'n.

御神は喜びの時刻をば定かに知り、
益をもたらす機のいつなるかを心得たもう。
われら御神への真実を守りおりて
その信仰に偽りなき様を認められなば、
われらの予期せざる間に御神ははや来りて
われらに多くの慈しみを施したもうなり。

5. Recitativo e Choral

Denk' nicht in deiner Drangsals-Hitze,
wenn Blitz und Donner Kracht,
und dir ein schwüles Wetter bange macht,
daß du von Gott verlassen seist.

患難の火、汝に襲いかかり、
重苦しき荒天、汝を恐れしむるとき、
神、汝をば見捨てたりと思うなかれ。
神は悩みの極みにありても、

Gott bleibt auch in der größten Not,	しかり、死の闇に赴くときにも、
ja gar bis in den Tod	その変わらざる恵みをもて
mit seiner Gnade bei den Seiden.	神の者らと共にいます。
Du darfst nicht meinen,	汝は思うなかれ、
daß dieser Gott im Schoße sitze,	神のふところに抱かれし者とは、
der täglich wie der reiche Mann	かの富める人のごとく、
in Lust und Freuden leben kann.	日々安逸を貧り、歓楽に生くる者なりと。
Der sich mit stetem Glükke speist,	うち続く好運にありつき、
bei lauter guten Tagen, muß oft zuletzt,	日々これ好日に浴すと見ゆる者、往々にして言わざるを得ず
nachdem er sich an eitler Lust ergötzt:	虚しき快楽にふけりしあげくの果てに
"Der Tod in Töpfen!" sagen.	「死は宴楽の鍋に潜めり！」と。
Die Folgezeit verändert viel!	時うつろえば、ものみなかわる。
Hat Petrus gleich die ganze Nacht	たとえペテロ夜を徹して
mit leerer Arbeit zugebracht und nichts gefangen:	労する甲斐もなく、何ひとつ漁り得ざりしとも、
auf Jesu Wort kann er noch einen Zug erlangen:	イエスの御ことばに従いて網打ちたれば
Drum traue nur in Armut,	なお成功を見るなり。
Kreuz und Pein auf deines Jesu Güte	ゆえに、貧困と十字架と苦患の境涯にあるとも汝がイエスの
mit gläubigem Gemüte.	慈しみに依り頼み、信仰の心をばひたすらに持つべし。
Nach Regen gibt er Sonnenschein,	主は雨を降らせし後に、日を照らし出させ
und setzet Jeglichem sein Ziel.	かくてよろずのことに限りを定めたもう。

6. Aria

Ich will auf den Herren schau'n,	我は主を仰ぎまつり
und stets meinem Gott vertrau'n.	常に我が神に依り頼まん
Er ist der rechte Wundersmann,	主こそまことの奇跡の人にして
der die Reichen arm und bloß,	富める者を貧しくならせて無一物とし
und die Armen reich und groß	また貧しき者を富ませて大いにし
nach seinem Willen machen kann.	その御心のままに行いたもうなり。

7. Choral

Sing', bet' und geh' auf Gottes Wegen,	歌い、祈りて、神の道を歩め
verricht' das Deine nur getreu,	汝の務めを忠実に果たし
und trau des Himmels reichem Segen,	天の豊けき祝福にゆだねまつれ。
so wird er bei dir werden neu;	さらば祝福は新たに汝に臨まん。
denn welcher seine Zuversicht	まことやその望みをば神におく者、
auf Gott setzt, den verläßt er nicht.	こを神は見捨てたまわず。

F．メンデルスゾーン

Kantate	カンタータ
Wer nur den lieben Gott läßt walten	ただ神様のみに統治され

1.Choral

Mein Gott, du weißt am allerbesten	我が神は、何が最良であるかを知っている。
das, was mir gut und nützlich sei.	私にとって善きこと、そして有益なことが何であるかを
Hinweg mit allem Menschenwesen,	すべての人間の成業よ、去れ、
weg mit eigenen Gebäu.	独善的な憂いよ、去れ。
Gib, Herr, daß ich auf dich nur bau	主よ、与えてください、私はただあなたのみ委ねる
und dir alleine ganz vertrau.	あなただけに全幅の信頼を寄せています。

2. Choral

Wer nur den lieben Gott läßt walten,	ただ神様のみに統治され、
und hoffet auf ihn allezeit,	いつも神の出現・援助を望むものは、

den wird er wunderbar erhalten,	十字架と悲しみの中で、
in allem Kreuz und Traurigkeit.	不思議な神により支えられる。
Wer Gott, dem Allerhöchsten, traut,	最も高き神を信頼する者は、
der hat auf keinen Sand gebaut.	砂の上に（家など）建てない。

3. Aria

Er kennt die rechten Freudenstunden,	御神は喜びの時刻をば定かに知り、
er weiß wohl, wenn es nützlich sei.	益をもたらす機のいつなるかを心得たもう。
Wenn er uns nur hat treu erfunden	われら御神への真実を守りおりて
und merket keine Heuchelei,	その信仰に偽りなき様を認められなば、
so kommt Gott, eh' wir's uns versehen,	われらの予期せざる間に御神ははや来りて
und lässet uns viel Gut's gescheh'n.	われらに多くの慈しみを施したもうなり。

4. Choral

Sing', bet' und geh' auf Gottes Wegen,	歌い、祈りて、神の道を歩め
verricht' das Deine nur getreu,	汝の務めを忠実に果たし
und trau des Himmels reichem Segen,	天の豊けき祝福にゆだねまつれ。
so wird er bei dir werden neu;	さらば祝福は新たに汝に臨まん。
denn welcher seine Zuversicht	まことやその望みをば神におく者、
auf Gott setzt, den verläßt er nicht.	こを神は見捨てたまわず。

Ｊ．Ｓ．バッハ

Ｋａｎｔａｔｅ Nr.161	カンタータ　１６１番
Komm, du süße Todesstunde	来たれ、汝甘き死の時よ

1. Aria

Komm, du süße Todesstunde,	来たれ、汝甘き死の時よ、
da mein Geist Honig speist	わが霊が獅子の口より
aus des Löwen Munde.	蜜を食す時よ。
Mache meinen Abschied süße,	わが別れを甘くしたまえ
säume nicht, letztes Licht,	引きとめることなかれ、最後の光よ、
daß ich meinen Heiland küsse.	我々が救い主に口づけするのを。

2. Recitativo

Welt, deine Lust ist Last,	この世よ、汝の喜びは重荷なり、
dein Zukker ist mir als ein Gift verhaßt,	汝の砂糖われ毒として嫌む、
dein Freudenlicht ist mein Komete,	汝の歓喜の光はわが彗星なり。
und wo man deine Rosen bricht,	世の人汝の薔薇を手折れば、
sind Dornen ohne Zahl	無数の刺が
zu meiner Seelen Qual.	わが魂の苦痛となりぬ
Der blasse Tod ist meine Morgenröte,	蒼白の死はわが曙光
mit solcher geht mir auf die Sonne	その光とともにわがために昇らん
der Herrlichkeit und Himmelswonne.	栄光と天の歓喜の太陽は。
Drum seufz' ich recht von Herzensgrunde	ゆえにわれ心奥より嘆息せん
nur nach der letzten Todesstunde.	最後の死の時のみを求めて。
ich habe Lust, bei Christo bald zu weiden,	われ喜びてキリストのもとに行き
ich habe Lust, von dieser Welt zu scheiden.	われ喜びてこの世に別れを告げん。

3. Aria

Mein Verlangen ist, den Heiland zu umfangen	わが望みは、救い主を抱き
und bei Christo bald zu sein.	やがてキリストのもとにあることなり。
Ob ich sterblich' Asch' und Erde	われ死して灰と土になるまで

durch den Tod zermalmet werde,	砕かれようとも
wird der Seele reiner Schein	魂の美しい輝きは
den-noch gleich den Engeln prangen.	天使と同じく光輝かん。

4. Recitativo

Der Schluß ist schon gemacht,	すべては既に終わりぬ、
Welt, gute Nacht!	この世よ、さらば！
Und kann ich nur den Trost erwerben,	われ今や慰めのみ得たり、
in Jesu Armen bald zu sterben,	やがてイエスの腕にて死すことにより
er ist mein sanfter Schlaf.	イエスはわがやさしき眠り。
Das kühle Grab wird mich mit Rosen dekken,	冷たき墓はわれを薔薇でおおわん
bis Jesus mich wird auferwekken,	イエスがわれを起こすまで
bis er sein Schaf führt	イエスがその羊を
auf die süße Himmelsweide,	甘き牧場へ導くまで
daß mich der Tod von ihm nicht scheide.	死がわれを神より引き裂くことなかれ
So brich herein, du froher Todestag,	いざ来ませ、汝喜ばしき死の日よ、
so schlage doch, du letzter Stundenschlag!	いざ打て、汝、最後の時の鐘よ。

5. Chor

Wenn es meines Gottes Wille, wünsch' ich,	わが神の意志とあらば
daß des Leibes Last heute noch die Erde fülle,	肉体の苦労が今日にもこの地に満ち
und der Geist, des Leibes Gast,	肉体の客たる霊が
mit Unsterblichkeit sich kleide,	天国の甘き喜びのうちに
in der süßen Himmelsfreude.	不死身となるを欲す。
Jesu, komm und nimm mich fort!	イエスよ、来たれ、そしてわれを救い上げたまえ
Dieses sei mein letztes Wort.	これが最後の言葉とならん。

6. Choral

Der Leib zwar in der Erden	たとえ肉体がこの世で
von Würmern wird verzehrt,	虫けらどもに食いつくされようとも、
doch auferweckt soll werden,	そは必ずよみがえらん、
durch Christum schön verklärt,	キリストの信仰によりて美しく輝き、
wird leuchten als die Sonne	太陽として光を放ち
und leben ohne Not	天国の喜びと歓喜のうちに
in himml'-scher Freud' und Wonne.	艱難もなく生きん。
Was schad't mir dann der Tod?	死は一体われの何をそこなうのか。

F．メンデルスゾーン

Ｋａｎｔａｔｅ	カンタータ
Jesu, meine Freude	イエスよ、わが喜び

1. Chral

Jesu, meine Freude,	イエスよ、わが喜び、
meines Herzens Weide,	わが心の楽しむ牧、
Jesu, meine Zier,	わが身の飾りなるイエスよ、
ach, wie lang, ach lange	ああ、いく久しく、げに久しく
ist dem Herzen bange,	わが心もだえ、
und verlangt nach dir!	きみをば慕いてあくがれこしぞ！
Gottes Lamm, mein Bräutigam,	神の小羊、わが花婿、
außer dir soll mir auf Erden	きみいまさずばこの世にて
nichts sonst Liebers werden.	わが心をひきとむるもの絶えてなし。

東京バッハ・カンタータ・アンサンブル

東京バッハ・カンタータ・アンサンブルは、東京芸術大学の学内サークルとして活動しているバッハ・カンタータ・クラブのOBを中心に、今回の様なバッハの宗教曲等の演奏会の為に編成される室内オーケストラである。母体となっているバッハ・カンタータクラブは、1970年に創立、顧問に服部幸三教授、指導・指揮に小林道夫氏を迎え、現在に至るまで、毎年の定期公演を中心に活発な活動を続けている。また、北海道・東北・東海・関西方面への演奏旅行も行っている。両合唱団とは、バッハ「ヨハネ受難曲」、ヘンデル「メサイア」等、数多く共演し、好評を博す。今回の演奏会に参加したメンバーも各自が、日本のトップオーケストラの首席奏者として、また独奏者やアンサンブルの一員として、各方面で活躍し、その卓越した演奏力と音楽性には、高い評価を得ている。

ヴァイオリンⅠ	蒲生克郷	冨安美穂	石井優子	二橋洋子		
ヴァイオリンⅡ	花崎淳生	海保あけみ	黒田恵里			
ヴィオラ	李善銘	桐山建志				
チェロ	花崎薫	コントラバス	蓮池仁	フルートⅠ	阿部博光	
フルートⅡ	佐藤憲介	オーボエⅠ	高井明	オーボエⅡ	森明子	
ファゴット	寺下徹	オルガン	今井奈緒子			

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

〈ソプラノ〉	阿部栄美子	石森幸恵	♪泉山真貴子	伊藤香織	伊藤美奈子
	伊藤由美	小原育世	○門脇たたえ	♪金子亜貴子	菊池節子
	菊池福子	久保木万喜子	熊谷充代	小池美紀	斎藤景子
	●斎藤純子	佐々木祐子	●佐藤澄江	佐藤智恵子	○佐藤千砂
	佐藤美由樹	沢田東子	清水真理子	菅村雅子	杉田綾子
	高橋由華	中村澄江	新沼理恵	沼山秀子	○平野陽子
	樋渡恵子	○福田温子	藤崎美苗	前川理恵	三浦敦子
	村上伊久子	柳田松子	矢幅嘉子	吉田朗子	吉田真由美
	伊藤美幸	岩井花文枝	斎藤さゆり		
〈アルト〉	○阿部怜子	井上未由子	小川暁美	兼田紀美子	桐原絹子
	朽木泉	●佐々木久子	佐々木美智子	鈴木千秋	○鈴木英美
	多田有里子	丹野まり	中田真佐子	中野晶子	鳴海真希子
	早川芙美子	早坂ルミ	福田祐子	山口厚子	吉田まき子
	乳井明子	Laura Cusick	川村瑞永	茂木容子	山崎美香
	佐々木邦子				
〈テノール〉	伊藤直己	遠藤康成	及川豊	太田穎則	●織田靖夫
	小沼佳弘	加藤進也	菊池信也	斎藤健	○佐々木朋也
	□佐々木幹雄	菅原伸作	千葉晴重	寺沢敬行	中野寛司
〈バス〉	泉悟	稲辺督	■小原一穂	小柳津教夫	佐々木直樹
	佐々木義幸	佐藤和久	佐藤英靖	下田潤	武田宏之
	淡野太郎	藤田知彦	○松島俊二	●三嶋豊	横山泉
	安倍勝				

●パトリーダー　○サブパートリーダー　■コンサートマスター　□サブコンサートマスター　♪練習オルガニスト

会員募集

盛岡バッハ・カンタータ・フェラインでは会員を募集しております。合唱経験の有無、個々のレベルについては全く問いません。現会員は皆それぞれに目標を持って努力しています。合唱が好き、音楽が好きというのが唯一の入会条件でしょうか。バッハの音楽は決してかた苦しいものではなく、人間味あふれ、ロマンティックですらあります。皆さん、私たちと一緒に歌いませんか。

どうぞお気軽に練習会場に直接おいで下さい。

■練習日　　毎週火曜日PM6:30〜9:30
■会　場　　カトリック志家教会礼拝堂
■曲　目（予定）J. S. バッハ カンタータ6番，67番
　　H. シュッツ 宗教合唱曲集より 他
■連絡先　　26—2509　菅原